

クレア バーバーと吉田晃良 交流日誌Ⅱ

8月10日 (日)

1 pm 高島屋1インフォメーション前集合。クレア、板倉さん、私の3人。今年、出雲の阿国が四条河原で「歌舞伎踊り」を興行して400年にあたり、伝統芸能があちらこちらで公演されている。今回は「文楽」を鑑賞する。

京都から、電車、地下鉄を乗り継いで約1時間、大阪の難波近くにある国立文楽劇場での観劇である。

演目は、「源平布引滝」2幕3場、車中、クレアには 'Genpei Nunobiki no Taki (The Nunobiki Waterfall)'

のあらすじの英訳を読ませたので、ストーリーは理解できたと思う。実際に観劇すると、ストーリーの理解よりも文楽人形、義太夫、三味線等、また、場面の華やかさ、賑やかさに興味を持ったようだった。我々が鑑賞しても今回の舞台は楽しいものだった。最後の場面では、人形が6体、馬1匹、線繰馬一つ、操る人間が15人と舞台狭しといった賑やかさだった。一体の人形を三人の人間が操るようになったのは1723年からのことである。終演後、劇場内の展示室で、文楽の歴史と共に、実物の文楽人形、大道具、小道具、義太夫で使用される楽器等を見学し、国立文楽劇場を後にしたのは6:30 pmだった。

京都に戻り、「陶器市」へ、東大路から鴨川まで五条通りの両側に、清水焼、また全国各地からあつまった陶磁器、クラフトマン達の店がぎっしり並んだ中を、品定めしながら一時間半ほど夕涼みがてら歩く。

大阪と京都でそれぞれの伝統に触れた一日の終わりに、なぜか、江戸前の寿司をつまみながら、文楽と清水焼の話はつきなかった。

今回は、8月16日大文字の送り火を、クリスチャンであるクレアと仏教徒の我々が一緒に鑑賞する楽しみを約束して別れた。

8月16日 (土)

7 pm 高島屋1Fインフォメーション前に、クレア、板倉さん、私の3人が集合。今夕は、五山の送り火(大文字)鑑賞に出かける。

大文字の大のは、73mX146mX124mの大きな文字を山の中腹に5m間隔で火床を組み上げ、火で文字を夜空に浮かび上がらせる壮大な Fire Art である。五つの山に、大、左大文字、妙法、船、鳥居の文字が浮かび上がる。

1662(寛文2年)に大文字のことが文献に現れ始めたというが、本当はもっと古くから行われていたようだ。

初めて、大文字を見たクレアから、「なぜ、大の字なのか? その大きさは、また、いつの時代から始まったのか」等々矢継ぎ早の質問を受ける。外国人たちが大文字の送り火を Bon Fire とよんでいるのを初めて耳にする。

私たちは、毎年このような行事を楽しんでいるのだが、その意味内容よりも、火

文字の壮大さや、火が点き火が消えてゆく美しさ、そして精霊を送る仏事として親しみ、慈しんできたようだ。まだ京都に、コンクリートのビルが建て込んでなかった私が少年の頃、街は瓦葺き屋根木造建築の町屋が建ち並び、フラットな町並みに、夜になれば闇に近い暗さの中に浮かぶ「大文字」は、街中のどの場所からも鑑賞することができた。人々は、先祖や亡き人に思いを巡らし、「大文字」の送り火に向かい手をあわせ合掌する姿が、自然な仏事としてあった。今は、観光が優先され、環境的にも鑑賞する人々に「盂蘭盆会」の雰囲気を与えなくなっている。美しい「大文字」の浮かぶ夜空より、クレアの質問で、文献や書物の調べものの世界に、私の頭脳が向けられていった今日一日であった。

8月25日（月）～8月27日（水）

3days workshop 開催。場所、大阪成蹊大学、芸術学部実習室（長岡京）。

開始日前日、アシスタントと夕刻まで準備をする。

25日10am集合、クレア、学生3名、板倉さん計5名、全員朝寝坊が早起きしたような顔つきで、一日目がスタート。

主題「自分の表情のある顔」

今日の課題 デッサン（鉛筆と毛筆による線描）

10:30am全員が大きめの手鏡を前に置き、画用紙に鉛筆によるデッサンを始める。受講者の中で異色は私の友人で通訳をしてくれている板倉さん、彼は中学校時代の美術の授業以来今日まで絵筆を持ったことがなく、初めてのデッサンと毛筆の線描を試みることとなった。その他は、現役の美術学生なのでデッサンの仕上がりは早く進む。

12:00pm～1時間昼食の為休憩。

13:00pmコピー紙B4に毛筆（書道用筆又は水彩筆）を使って自分の顔を線描する（顔を塊、量に捉える）。それぞれ数枚試作する。毛筆の線で量や塊を表すには、筆の先のみ、筆の中程まで、筆全体を使うといった線の描き方を、筆に水を含ませ黒板に見本を描いてみせる。鉛筆や木炭で描く陰を付ける事により立体感を表す西洋画のデッサンと違い、毛筆の描き方は線の太さや強弱で立体感を表す。黒板に描かれた毛筆の線を、クレアは目を輝かせて注意深く見ていたようだ。しかし彼女はペンや鉛筆のように筆を持ち、腕全体で筆を動かすことが難しいようだった。

描き始めて2時間位経ち、各自のスケッチが20枚程になったところで、一人ずつ、数枚のスケッチの中から各受講者と相談しながら、毛筆で描かれた線が少なくてもできるだけ表情豊かに描かれたものを選び出す。次は各自選び出された1枚のスケッチを型紙に写す作業にはいる。（型紙は、和紙に柿渋を塗ったもので水や害虫にも強く、京友禅の型紙として江戸時代より今日まで用いられている。）

26日 今日の課題：型紙制作と友禅染技法による染色

午前中は、各自が型紙を彫る（型紙に毛筆で描かれた線を切り抜く）事に専念す

る。12:00pm 昼食休憩。

午後からは、その型紙を使って染色作業を始める。先ず、丸刷毛の使い方を習得する為、50cm角の綿ブロードに、予め練習用に作っておいた型紙（直径4cmの円形が数個切り抜いてある）を置き、9色の色見本を使って擦り込み技法を練習する。この技法習得を終えると、いよいよ、各自がスケッチを基に作った型紙による染色が始まる。

染料：微粒子樹脂顔料

素材：厚手木綿・天竺綿（織物）50cm角

薄手木綿・綿ローン（織物）50cm角

Tシャツ（ニット綿）1枚

丸刷毛による摺り込み方染色技術を、3点の異なる素材を使用することにより刷毛の使い方の違いを学習する。手作業を通して、クレアは日本の工芸手法を体験することとなる。

Tシャツを染める頃には、すでに17:00pm、明日の日程の作業であるが、途中でやめる訳にはいかず、仕上げまで時間を延長する。全て完了したのは18:30pmを過ぎていた。

京都の蒸し暑い残暑の中、1時間ずつの昼食休憩以外ティータイムもなく、2日間作業をし続けた京友禅技法による自画像染色作品3点の完成であった。Tシャツを着て記録用写真撮影、ファインダーの向こうに、クレアはじめ全員の少し満足気な笑顔があった。

3days workshop 学習のポイント

テーマ：自画像（自分の表情のある顔）

- 1 表現について
鉛筆デッサンによる表現（西欧流）
毛筆による表現（日本流）
- 2 友禅染技法の習得
丸刷毛の使い方（摺り込み方染色技法）
3種類の綿布に染色
織物：天竺木綿（厚手）綿ローン（薄手）ニット（Tシャツ）
- 3 色による自分自身の表現
何をイメージして色を選ぶか